

特集

“学生教官物語”

後輩のために、モロ肌ぬいで訓練指導に当たった学生教官の存在は貴重である。

現役時代、恐ろしい思いが先に立って、近より難しい思いがしたが、今になってみると、全てが、楽しく、懐しい。先輩、後輩っていいもんだ。人生は振り返ってばかりいては進歩はないが、教官で過した一時期、ドナリ散らし、猛り狂いながら、いつくしみ育て上げた学生の成長を見守る時、満足感に思わず口元がほころぶ。その思い出こそが、教官時代の宝物なのである。そんな素晴らしい宝物が得られた我が人生に心から乾杯しようではないか。

夕陽の沈むランウエイ。一つ覚えの捨て台詞。“俺がやらなきゃ、誰がやる！”学生教官の誰もが持った心意気ではなかったか。

今回お世話になった先輩教官について、ぞん分に語ってもらうために特集を組んでみることにした。

厳しい窪田さん

K.M. (昭和45年卒)

「イオラス」をはじめ数多くの名機と共に、窪田コーチの厳しかった合宿訓練が懐かしく想い出されます。

昭和40年前半は、学連加盟の各校もやっと単独合宿が出来る様になり、「全国制覇」を目指して同志社も選手の強化、新人の育成に力を入れ始めた時期で、当然窪田教官の訓練も厳しく、日の出から日没まで翼の休まる時がない猛練習が続きました。

当時はまだ独身で、「俺には今、仕事とグライダーだけしかない。同志社を全国大会で優勝させることしか考えてない！」とすべて勝利至上の訓練で、そこには当然部員の選手としての非情なセレクションがあり、「運動部としての航空部のあり方」を厳しく共に考えておられました。

反面、朝のテストフライ時、ランウエイの白線

に訓練生の赤い帽子を置かせ、その上に着地するという技倆と遊び心も持っておられました。(実際は2m程ショートした！)

そんな窪田先輩も近ごろは、「最近、若くて元気な教官が育ってきたので、俺も滑空界の“生きた化石”みたいなもんや！」と弱音を言っておられる様ですが、現在モーターグライダーにも熱中。「週末はほとんど家におりません！」と大恋愛の末結婚された夫人もソアリングウイドウ。まだまだ「大空への憧れ」の強さは最近の若い学生諸君も足もとにもおよびません。

現在航空部の監督をされていますが、創部50周年もすぎ、機材も充実し、バックアップするOB会組織も確立した今、ぜひ念願の「全国制覇」を果される様応援してゆきたいと思います。

佐藤先輩を偲んで

K.K. (昭和44年卒)

歳月は早いもので、私も卒業してから、もう20年も過ぎてしまいました。学校を卒業したというよりも航空部を卒業させていただいたと言ったほうが早いような気が致しますが……

若い一時期グライダーに夢中になって、富山、岡山、福井又は八尾と各飛行場での合宿に明け暮れた当時が、この文章を綴りながら思い出されてきます。

佐藤真二先輩は私の1年上にあたり部活指導で色々お世話になりましたが、確か先輩が2回生（私が入部したての1回生）の夏、グライダー選手権が名古屋空港（今ではとても開催できる飛行場ではないのですが）で開かれて2部の部で2位に入賞された時があったと思います。先輩から「お前、地元だから必ず見学にこいよ」といわれ空港迄駆けつけましたら、佐藤先輩が見事2位に入賞されて、表彰盾を受けとられている姿が今でも思い出されます。私も先輩に少しでも近づきたいと思う気持ちがその後の3年間グライダーに明け暮れた1つのキッカケになったと今でも思っております。

先輩が2回生の後半から3回生にかけて私の後部座席に座って頂き、幾度となく御指導して頂きました。先輩は何時も冷静沈着な方で、飛行を終った後の批評はあまり長くはなかったのですが、ひとことひとことに的確な批評を頂いた事をはっきりと覚えております。

残念な事に、先輩は若くして病にたおれ、お亡くなりになれましたが、今でも高い空から航空部の発展を見守っておられる事と思います。

先輩の御冥福を祈りまして、ペンをおきます。

箕浦さんの思い出

N.H. (昭和49年卒)

私が現役のころ、ピストには同志社の学生教官がゴロゴロされており、その雰囲気たるや下っ端の私などには近寄りがたく、理由もなくその半径50m以内に入ることもとても出来ないおそろしい集団でありました。

合宿の空気も関東なにするものぞ！関西に同志社あり！といった熱気が、ランウェー全体に張り詰めておりました。そしてその熱気を中心におられた1人が箕浦教官であり、それはとてもきびしい教官で、私など後席箕浦教官と知らされただけでバリオ+10、報告するその足がふるえたもので、直線滑空などVセットどころのお話ではありませんでした。……そして光陰矢の如し……

昭和63年3月21日京都での楽しい親睦会が明けた朝、ロビーにいた私のところへ、本当におひさしぶりにお会いした箕浦さんが近づいてこられ、「君達の年代にもいろいろ迷惑をかけてしまい申し訳なかった。又、今日から仲間に入れてくれ」とおっしゃった時は、返す言葉がすぐにはみつかりませんでした。

報告します！箕浦教官！今、もし後席に乗って頂くことが出来たならば、私、学生時代よりももっとすばらしい直線滑空が出来ると言えるような気が致します。どうぞこちらこそよろしく願い申し上げます。

—— マッハ数 ——

ライト兄弟が動力付飛行機で人類最初の飛行に成功した年より15年も前に、ドイツの物理学者エルンスト・マッハは、瓦斯による流速比、及び対地速度の実験に着手した。現在のマッハ数は、速度と音速の速度比のことであるが“マッハ”は彼の名前から取ってある。

加藤教官と模型

M.T. (昭和49年卒)

今を去ること19年前。加藤さん、斉藤さん、山田さんの3教官がおられました。皆さんがそれぞれ頑張っていて、同志社は今が盛りと思われた時代でした。

多分、助教から教官になられ、自信満々だったと思われます。残念ながら、そこに入部したのが我が同僚17人でありました。飛んで火にいる……とはこのことでした。

初めてBOXに行った時の学生服姿の3教官の重い、暗い雰囲気。かくて、我々は3教官と先輩方にBOXでも八尾の格納庫でも福井、富山でもみっちり鍛えられることになったのです。

なかでもシビアーなのが加藤教官でした。2、3年生からも要注意人物と言われる程でした。特に合宿中は神経が張り詰めているようで、近よると危険な感じで僕はつねに避けていました。

しかし、とうとう叱られる日が来たのです。搭乗順が回って、後席はまさかと思った加藤教官でした。搭乗報告からミスって、小言を言われ、また搭乗中は離脱操作、離脱姿勢、傾きチェックに速度管理、そして着陸後は縛帯はずし、H23Cのノーズに座るのが遅いなどさんざんな目にあいました。

しかも4年後、吉井川では僕の助教初日にOB教官として前席に乗られたのには参ってしまいました。まともに飛べるわけがない、1年の頃を思い出しがタガタになったのは言うまでもありません。

ただ、ええ思い出は(「ええ」は「え〜え」と加藤さんは大分訛^{オオイ}りで言っていた)加古川での高度900~1200mの滞空でした。僕はこれでグライダーの良さをおぼえ、C章もあっさり取得したようにおもいます。

加藤教官の思い出で、忘れてならないのが飛行機のプラモデルです。下宿ではところせましと、模型の箱と塗料と航空雑誌が置いてあり、触ると文句を言われそうでした。

当時を振り返ると加藤教官の同期の山田教官が亡くなられるという悲しい事件があり、先輩方も僕達も大変な時代でした。

ヒゲの大久保さん

J.N. (昭和52年卒)

私が入部した当時の合宿は主に吉井川滑空場で行っていました。当時は現役の学生で教育証明を取っている人は少なかったので合宿に来ていただいていた教官はすでに卒業して社会人となり別に職業を持っていらっしゃる人がほとんどでした。

大久保先輩もその中のおひとりで、私は2回程合宿で教えていただいたことがあると思います。当時私は1年生で(たぶんまだ19才)あったので、当時人数の多かった同期生たちの目にはかなり年配の方のように映ったようでした。ヒゲが濃い方だったと思いますが、そのせいか誰かが「ヒゲのオッサン」と呼んでいた事を思い出します。大久保先輩はその時は卒業したばかりではなかったのでしょうか。そういうウワサをしていた新人部員もいたわけです。

その後合宿ではお会いする機会はなかったのですが、5年後10年後に翔友会などでお会いしても、当時のイメージのままのお姿です。

土田アンパンマン

H.O. (昭和52年卒)

いまでこそアンパンマンは全国的人気のマンガの主人公ですが、しかし我が同志社大学体育会航空部には、今から15年も前から僕等の味方アンパンマンが、ご活躍されておられました。

土田教官は私どもが1回生のとき4回生で3年先輩にあたりますが、お顔とご性格が丸いことから仲間内では陰で「アンパンマン」とお呼びしておりました。「今日はアンパンマンの機嫌が悪いけんソロはないでえ」「アンパンマンにアッオコラレタッ」と言った具合です。ある合宿のとき、昼食のアンパンと間違っで土田教官の顔に齧りつこうとした暑さばけの仲間もいました。(これは90%冗談です)

さて土田教官との思い出ですが公私ともにお世話になった記憶があります。先斗町にはよく飲みに来て行ってもらいました。(どういう訳かいつも懐具合がよかった)読書がお好きで私どもは常々「本を読みなさい」と注意され、おかげで読書の習慣がついたように思います。航空部においては私ども1回生はあまり叱らず上級生(2~3回生)には厳しく、本当に良き兄貴分でした。

現在も航空部の活動にご尽力されているとお聞きしておりますがこれからもお身体に気をつけお元気でご活躍されることを心よりお祈りしております。

借景

先斗町の東を流れる鴨川。兩岸に植えられた桜堤は、上賀茂から出町までを賀茂川堤、丸太町から五条までを一般に鴨川堤と呼んでいる。東山を借景にした西側からの景色は実に素晴らしい。

塚本教官との秘密

H.M. (昭和57年卒)

先日ふと、学生時代のライセンスと共に宝物であったログブックを見つけた。パラパラとめくると、飛行記録と共に多くの教官の署名が残されていた。その中に、入部以来卒業まで指導していただいた塚本教官の署名を見つけた。最後のサインから8年。随分月日が経ったものだと懐しんでいるうちに思いは学生時代にとんだ。

入部して最初の1年間、当時の私にとって最上級生、教官、OBの方が陣取っているピストは、なんとも近寄り難い雰囲気であった。機体押しが遅いというのは怒られ、声がでていないというのは怒鳴られ、それはそれは緊張の連続であった。そんな時、班長からかかる「ウインチ側道監！」の声。時には半日もフライトを忘れられる寂しい場所だが、逆にのんびりと開放感に浸れる唯一の場所でもあった。

当時、塚本教官は正確には助教官であり、最も頻繁にフライトする役であったが、なぜかここで一緒になることが多かった。

ウインチマン指導という名目のもと、ウインチ側に来られエンジンカバーの上に寝ころがって日光浴されている姿が印象的であった。

あれほどログブックにサインをいただいていたおきながら、フライトの思い出や教官としての思い出がでてこないのはなぜだろう。へんぴな場所？でのたわいのない出来事ばかりが強い思い出として残っている。コーヒーをいれてもらったり、「道監降りてこい！」と怒鳴られて恐る恐る降りていくと、ウインチ裏のたき火でこっそりと焼いたやきいもを手渡されたこと。ラーメンを作ったこと。そこには、あの恐ろしい？4年生、厳しい教官としての塚本先輩の印象はなく、皆が一緒の秘密を持っているかのような雰囲気があふれていた。

リッチな田口さん

T.O. (昭和56年卒)

それにしても、もう10年になるとは…。当時、教官といえば私には、“コワーイセンセイ” というイメージだったので、田口さんが学生教官になられた時は、すごいなー、さすがだなーと、ソソケイの念を新たにしましたものでした。入部したての頃、他の先輩が田口さんを指して、「こいつはこないだソロに出おってんで」と言われ、「はぁーそうですか」とさも感心したように答えた事を覚えていますが、その時私は、ソロとは何か知らなかったのです。

その後、日がたつにつれ、学科といえば田口さん、黒板を背に、立て板に水のごとくいささかのよどみなく語られるその姿は、古く薄暗い部室で、^{こつこつ}神々しくさえ映ったものでした。ただ、いったん質問したら山盛り答えが返ってきてたじろいだ事もしばしばでした。

他に田口さんで思い出す事は、やはり、白いオペル、ラジコンのグライダーを巧みに操っておられた事、みんなでしょっちゅう、“ちょーす” “ごっちゃーん” などと言いつつ、調子よくおごって頂いた事、他の部員はいつも慢性金欠病にうなされているというのに、ひとり涼し気な顔をしておられた事、「航空部イコール貧乏人」の公式に当てはまらない唯一の人だったといえるでしょう。即ち、当時の田口さんをひとことで表現すれば、知性キラキラ空飛ぶオボッチャマ、というところでしょうか。リッチであったことを、かなり強調してしまいましたが、あくまでも当時の田口氏の一面であり、現在の田口氏については、私は、長らくお会いしていませんので皆さん、たかるときは、ご自分の目でよく見きわめてあげて下さいますようお願い致します。

学連教官として活躍中の田口さん
(福井空港における学連7号命名式の日)



宮地先輩とベント

M. S. (昭和59年卒)

私は、先輩を部室と学食以外であまりみかけたことがないので、プライベートな面はよく知りませんが、連想ゲームで「宮地先輩」と聞かれれば「厳しい教官」、「お金」とたぶん言うてしまうでしょう。先輩は、クラブ活動においては、いつもシビアな姿勢でのぞんでいらっしゃいました。何をやってもどんくさい私を先輩は、厳しく、的確にアドバイスして下さり、少しおっかないイメージがあったのは確かです。でも、その先輩も、お金にだけはどうも弱いらしく、「先輩！部費払って下さい」「悪い！今日はお金がない！」本当に、こんなやりとりをよく耳にし、会計を泣かせていらっしゃいました。その先輩も今では、ベントに乗っていらっしゃるということです。(先輩！滞納金はもう返済されましたか？)

スッポンの光安さん

T. T. (昭和59年卒)

そこは学生達から「^{すかた}館」と呼ばれていた。塚本コーチの経営する下鴨泉川町の下宿である。同志社の部員も他校の部員も、間借りしている者もそうでない者も、少なからずお世話になったところである。その「館」の玄関に1番近い部屋は、航

空部関係者が絶えず出入りし「第2BOX」「下鴨^{おけ}宿舎」などと親しまれていた。その人気の理由はそこに学生教官がいたからである。そう、あの光安さんである。

光安さんは訓練生の頃から「スッポンの光安」(捉えたプラスは決して逃さない)の異名をとるほど秀れた技量をもっていたという。そして教官になってからは、今日は木曽川、明日は福井と愛車XS650(ヤマハのツインエンジンのオートバイである)に乗って、学連中の訓練生を指導しに赴くのであった。

優秀な教官でありながらも、威張ることなく、いつもジョークたっぷり、皆から親しまれる。これが光安さんの魅力であった。当然、エピソードも数多く残されている。

「教官不足に困る班長に頼まれると、サラミソーセイジ3本で飛んで行く」

「訓練の合間に突然お^{みせや}店屋さんごっこを始める」
「陸送中バイクで先に行った筈なのに、なぜか雄琴温泉を過ぎると、うしろを走っていた」

「朝、宿舎当番が起こすと、ネコになっている(かならずニャーと答えるのである)しかし走るときはゴキブリになる」

数えあげればきりが無い。

OB教官では持ち得ない“親近感”が学生教官の良さだとしたら、光安さんは最高の学生教官だったと皆が思っているだろう。

ライダーと研究(土の^{つち}分析をしていた)に忙しいのか、学生時代には光安さんは彼女がいなかった様だが、流石は教官、卒業後に真貴子さん(旧姓中井、光安さんの4年後輩である)とテイク・オフ。同志社の伝統となりそうな部内結婚を实践されている。

北林教官と AV

S.M.(昭和62年卒)

私が学生の頃、学生教官は北林教官、金石教官の御2人だけでありました。航空部に入部したての私にとって、学生でありながら教官をされているというのは、何とも偉大に見えたものです。

豊富な知識、抜群の操縦技術、部を引張っていく力、どれをとっても自分も将来あの様になれるものだろうかと思わせるものがありました。

上級生だから、教官だからといって威張る訳でもなく、全てにおいて余裕が感じられました。(学校に5年通われたのも、この余裕のなせる技でしょうか)

いつもグレーのスターレットを乗り回し、無線やらAV機器にやたら詳しくたのを見ています。(おかげで、純な私は、生まれて初めて裏ビデオというものを見せてもらいました)

新入生の頃、入部したいと航空部の扉を、初めて叩いた時、部員が皆異様にやさしかったのですが、特に北林教官はいつもニコニコしていたので、あの笑顔にだまされて入部した様なものです。

しかし、思えばここから、ある意味での人生が変わったのですから、何とも不思議なものです。

いずれにせよ、常に自分の技術を見てもらえる学生教官、特に自校の教官というのは、新人で基礎も固まっていない者にとっては、非常にありがたいもので、本当に感謝しています。

これからも、益々後進の指導に励まれますように！

金石さん有難とう

S.K.(昭和61年卒)

今から5年前、世間では、クレージーキャッツの曲や映画がリバイバルヒットしていました。当時、学生教官だった金石さんは、クレージーキャッツの曲がお好きで、「人生で大事なものは、タイミングにC調に無責任」だとか「金の無い奴は俺んここに来い、俺も無いけど心配するな、見ろよ青い空、白い雲、そのうちなんとかなるだろう」なんて歌を、私もたびたび金石さんから聞かせてもらったものでした。当時、同じく学生教官だった北林さんや、整備の坂口さんも、クレージーキャッツの曲がお好きで、皆さん単に曲が好きというだけにとどまらず、性格や行動パターンまで影響を受けておられるようでした。とにかく皆さんすっかりC調になられていました。

また、当時は、BOX(部室)が部員のたまり場となっていて、いつも講議のあき時間をつぶす部員が何人かいましたが、金石さんは、合宿以外は、たいていBOXでひまそうな顔をして座っておられました。当時、金石さんは航空部のひまトリオの一員でした。(あとの2人は誰か忘れてしまいましたが)

訓練中の金石さんは、細かい事を1から10まで、口うるさく注意されるタイプの教官ではありませんでしたが、1から10までのうち1だけを1回しか注意されませんでした。それが、「同じことを何回も言わせるな」という無言の圧力のように感じられ、そういった面では、厳しい教官でした。

できの悪かった私たちを、暖かく指導して下さい、個人的には、初ソロに出していただいた金石さんに感謝申し上げ、終らせていただきます。

新庄教官の横顔

H.K.(4年)

新庄さんを一言で表現すると、「キレる人」という言葉がぴったりだと思う。あのクールなルックス。ビシビシと物事の核心をついた発言。そして、在学中に主将として発揮したあの手腕。どれをとっても、社会にでたら成功するであろう素質を感じさせる人だという印象がある。

私が1年生として入部した時、新庄さんは既に4年生の「雲の上の方」であったが、たびたび田辺に来ていただいて、学科などをしてもらった。それがあまりに堂に入ったものだったので、後に教官となられた時も「あぁ、やっぱりなぁ」と納得したものだ。最近はお仕事が忙しいのか、なかなかR/Wでお会いすることはないが、1度教官依頼でお電話した時には「K a - 6に乗るためには」というレクチャーを懇切丁寧にしていた。ありがたいことである。ペロンとはね上がった京都ー東京間の電話代も授業料と思えば安いものであろう。

俗にいうカッコイイ新庄さんは女の人にもてるというもっぱらの噂だ。かなり前の話になるが「新庄さんカンパリ事件」というのは結構有名である。女子部員がそろっておしゃれな北山通りのカンパリという喫茶店に行くと、駐車場にはどこかで見たことのある滋賀ナンバーの赤いトゥディが…。隣りに髪の長い女の人を乗せた新庄氏は何も言わずに走り去ってしまったが、その後の我々の恰好の噂のマトになったのは言うまでもない。

(本人は「妹だ」と主張して止まなかったが)その他にも氏の女性がらみの話はたくさんあるがもてすぎるというのも困ったものだと思う。今度お目に掛ったときには、そのダンデー振りにますます磨がかかっていることであらう。

ゴメンナサイ森川さん

R.K.(2年)

「わぁー、いかついオッサン」私が、森川さんを初めて見た時の正直な気持ちでした。(森川さん、ゴメンナサイ)「いったい何者だろうか」私は、ずっと思っていました。そして、グライダーの後席を見ると、なんと座っていらっしゃるではないか、森川さんが。「え～ん。こわいよ～」と。心臓の弱い私は今にも泣き出しそうでした。とにかく1年生の頃の私は、森川さんにびびっていました。森川さんを見ると、呼吸は嵐の森に、鼓動は海の地響きになっていました。しかし、航空部にだんだん慣れてくると、私は、森川さんに対してひどい誤解をしていたことに気がきました。「こわいオッサン(いかん、口がすべった)ではなく偉大な^{かた}方なのです。森川さんは」現役時代は、学連委員長、三整、ウインチマン、4年で卒業されてしかも、大学院に進まれて、教証とまさに我が航空部のスーパースターなのです。話をしてみますと、冗談もよくおっしゃるし、(但し、森川さんのギャグで、腹筋がつるほど笑ったことはまだない)とても良い方なのです。考えてみますと、同期の連中では、私が1番森川さんと関係が深いのです。(深い関係といってもアブナイ関係ではない)私は、複座機の機体係であるので、森川さんからグライダーについて色々教えて頂きました。また、今年の新人合宿では、なんと一緒にグライダーに乗ってNHKにテレビ生出演もしました。まぁ、森川さんと私には、色々な思い出があるのです。森川さん、これからも我が航空部をあたたく見守っていて下さい！